

伝記作家としてのジェイムズとアダムズ

大 井 浩 二

1879年12月、ヘンリー・ジェイムズ(1843-1916)の伝記『ホーソン』⁽¹⁾は、イギリス文人双書の一冊として出版されるが、新進作家として頭角を現していたジェイムズはレオン・エデルのいわゆる「ロンドンの征服」に忙殺されていたせいか、時間をかけて準備することができなかった。結局、3年前に出版されていたジョージ・レイスロップの『ホーソン研究』、ソファイア・ホーソンが編集した『ノートブックス』、それにホーソンの主要な作品を基にして書き上げることになったが、ホーソンの最初の長編『ファンショール』にも目を通してない有り様であった。「ナサニエル・ホーソンの生涯に関する資料はけっして豊富でないし、またたとえ豊富であったにせよ、伝記作者の目的には限られた程度でしか役立たないであろう」という冒頭の一文は、勉強不足のジェイムズの言い訳めいた発言と取れないこともない。当時、イギリスに滞在中で、ジェイムズに相談を持ちかけられたジュリアン・ホーソンは、ジェイムズが父ナサニエルの伝記の書きづらさをこぼしていた、と回想し、完成した作品については、「そこに溢れている含羞は、私には明白であったが、多くの人には傲慢と解された」⁽²⁾と語っている。

「含羞」と「傲慢」のいずれのせいであったにせよ、伝記『ホーソン』を手にする読者の多くは、若い頃から強い影響を受けてきた先輩作家に対して、ジェイムズが意外なまでに冷淡で、距離を置いた態度を取っているのに驚かされるのではあるまいか。たとえば、彼は短編「あざ」や「胸中の蛇」などについて、「何かぎごちなく、機械的な、まるで中味がその外装としっかりしていないかのように、やや不釣り合いなものがあるような印象を受ける」と不満を述

べ、「ラパチーニの娘」や「ヤング・グッドマン・ブラウン」のような代表的な短編に「小さな傑作」という呼び名を与えているにすぎない。ホーソンの最高傑作『緋文字』を論じるにあたっても、ジェイムズは「現実性の欠如と空想的要素——ある種の皮相的象徴主義——の乱用」という「欠陥」を指摘し、「『緋文字』には多くの象徴主義がある。ありすぎるとわたしは思う」と述べているだけでなく、その「欠陥」を明確にするために、類似の主題を扱ったJ・G・ロックハートの『アダム・ブレア』との比較を試みている。伝記作家ジェイムズは『アダム・ブレア』が「たくましい総体的悲哀感をもって語られ」、「主題の現実性が大いにみちあれている」点に『緋文字』以上の魅力を見いだしているのではないか、という皮肉な印象を抱く読者は少なくあるまい。

『ホーソン』を論ずる者が例外なく言及するのは、伝記作家ジェイムズが作成した「他国にはあってアメリカの生活構造には欠けている高度の文明の諸項目」のリストだろう。「ヨーロッパの意味の国家もないし、実際、特別な国家の名称もないようなものである」と書き出され、宮殿も大寺院もオックスフォードもイートンも文学も小説も絵画もないアメリカの「未開で単純な社会」を非難する有名な一節を、ここで長々と引用する必要はあるまい。もちろん、ここでのジェイムズの目的は、「総体的に見たアメリカの調子が、ひどく地方的であった」ことを明らかにすることであったが、このアメリカ文化の「地方性」からアメリカ作家ホーソンの「地方性」という特質が導き出されているのは（「彼はこのうえもなくまた一貫して地方的であった」）、ヨーロッパ経験豊かなジェイムズが一段高いところから先輩作家を見下ろしているといった印象を与えかねない。あるいはまた、ホーソンを「原始的タイプの文学者の最後の典型」と見做すジェイムズの姿勢は、ホーソンの狭小な「地方性」とは対照的に、「もっと教養をもち」、さらに「もっとコスモポリタンである」アメリカ人としてのジェイムズの国際性を読者に意識させるにちがいない。リチャード・H・プロドヘッドは「『ホーソン』は青年時代のチューターたちを自分の背後に置くことに夢中になっている、名前を売り出したばかりの作家の仕事である」と評し、そこではジェイムズの「芸術の保護者」であったはずのホーソン

が「同情的な親切を必要とする年老いた人物」に成り果てている、とまで言い切っている⁽³⁾。

こうした伝記作家ジェイムズの姿勢は、『ホーソン』に一種の世代論を持ち込むことによって、かつての「チューター」と彼との間の距離をさらに強調しようとしている点にもはっきりと窺われる。その著者によると、ホーソンの属していた世代、つまり「19世紀と共に成長した世代は、50年の間に、若い共和国の巨大な、間断ない物質的發展を目撃した」ために、「国家の雄大さとか、その永続性だとか、地上の帝国にありがちな苦難を経ないですむとかいった一種の迷信的信念」を抱くことになった。「この信念は、陽気な楽天主義的要素によって生気を与えられた、素朴で無批判的なものである」と主張するジェイムズは、ホーソンの世代のアメリカ人が「偉大なアメリカ国家は、人間の他の諸制度とは異なり、特別な神慮がそれを見守り、永久に楽しく前進するであろうし、この世の他のすべての国家の苦闘する人びとや探求する人びとの避難所として、その広広とした豊かな胸をさしだした国は、時代の戦いに楽楽と勝残るに違いない」と信じていたばかりでなく、「アメリカの未来にたいするこうした考え方の中には、みずからが解決すべき問題をもっているという意識がおめでたいほどに欠けていた」とも説明している。要するに、この「素朴で無批判的な」世代のアメリカ人は、1776年に誕生したアメリカ共和国の例外性を信じて疑わなかった、とジェイムズは語っているのである。

だが、この「初期の単純な世代」の「迷信的信念」は南北戦争という歴史的事件によって完膚無きまでに打ち碎かれる。「この世で最良の共和国が、兄弟殺しの修羅場と化してしまう」のを目の当たりにして、「彼らの迷妄は手荒く払いのけられてしまった」結果、「彼らはうなだれ目を閉じるほかはなかった」とジェイムズは説明しているが、この南北戦争を経験した世代のアメリカ人には「ある種の釣り合いと相対性の感覚、世界がこれまで感じられたより複雑な場所であり、未来はいっそうおぼつかなく、成功はいっそう困難であるという感覚」が生まれることになった。

世の中が進むにつれ、善良なアメリカ人も今までよりその数を増していくことは明らかである。しかし、来るべき時代の善良なアメリカ人は、その自己満足的な、自信たっぷりな祖先よりは、もっと批判的な人間になることであろう。彼は知恵の木の実を食べたのである。彼は懐疑家にはなるまい。ましてや、もちろん冷笑家にはなるまい。だが彼は、その名高い行動力を裏切ることなしに観察者となるであろう。彼は神慮の計りがたさや、この世ではあらゆることが起こりうることを思いだすであろう。

もちろん、この一節を書き記しているジェイムズ自身は、南北戦争を直接経験してはいないが、にもかかわらず、彼が「来たるべき時代の善良なアメリカ人」の一人であることは否定できない。つまるところ、南北戦争以前の世代の属するホーソンが「素朴で無批判的」であったとすれば、新しい世代のアメリカ人としてのジェイムズは「知恵の木の実を食べた」、「批判的な人間」であることを、ここで伝記作家ジェイムズは高らかに宣言していると言い切ってよいだろう。「初期の単純なタイプのアメリカ人」としてのホーソンに対立する、南北戦争以後の批判的で、ソフィスティケートされたアメリカ人としてのジェイムズ自身を語っているという意味で、伝記『ホーソン』のなかに、チャールズ・キャラメロのいわゆる「自伝的サブテキスト」⁽⁴⁾を読み取ることができるにちがいない。伝記作家ジェイムズは彼の対象を痛烈に批判することによって、彼自身の批判精神を強調することを試みていたのである。

ここで読者は、伝記作家ジェイムズがホーソンを「初期の単純なタイプのアメリカ人」と規定したとき、伝記作家ホーソンが大学時代からの親友のために書いた『フランクリン・ピアス伝』（1852）という大統領候補の選挙用伝記を話題にしていたことを見落としてはならない⁽⁵⁾。そこでのホーソンはアメリカ大衆の好みに合った「カルチュラル・ヒーロー」の肖像を何のためらいもなく描き上げ、アメリカの可能性に無限の信頼を置いていたと考えてよいが、たとえば 1850 年の妥協法案を支持して悪評を招いたピアスのために弁じているホーソンの一節を引用したジェイムズは、それを「この人 [ホーソン] の安易な

政治的態度の一例」と呼び、「同情的伝記作者の特権」を利用した『ピアス伝』の作者を批判しているのである。結局のところ、やがて南北戦争を引き起こすことになる奴隷制度を擁護した大統領候補の保守的な態度を弁護したという事実は、ホーソンが「初期の単純な世代」を代表する人物であったことを証明している。「ホーソンをみごとな典型とする善良なアメリカ人は、批判的でなかった。そして、彼にとって、フランクリン・ピアスがきわめて適任な大統領に思われたのは、おそらくこの理由からであったろう」と、ジェイムズはホーソンの「素朴で無批判的な」態度に読者の注意を促している。伝記作家ジェイムズは伝記作家ホーソンの「楽天主義的要素」に注目することで、「知恵の木の実を食べた」アメリカ人、南北戦争以後の「批判的な人間」としての自らのアメリカン・アイデンティティを浮き彫りにしているのである。

ところが、『ホーソン』でジェイムズが攻撃目標としていた伝記作家は、彼の主人公としてのホーソンだけではなかった。すでに述べたように、『ホーソン』を執筆するに当たって、ジェイムズは3年前に出版されていたレイスロップの『ホーソン研究』に依拠していたが、そこでのホーソンはシェイクスピアやゲーテと比肩し得るアメリカ作家として最大級の賛辞が捧げられていた⁽⁶⁾。エドウィン・H・ケイディは「レイスロップのホーソンは強烈な観念性を持った天才となる」と評し、リチャード・H・ブロードヘッドも『ホーソン研究』を「ホーソンの生涯と作品の実質上の神聖化」と呼んでいる⁽⁷⁾。著者レイスロップはホーソンの娘婿であっただけでなく、有力雑誌『アトランティック・マンスリー』の副編集長の肩書を持ち、やがてホートン・ミフリン版のホーソン全集十二巻を編集することになる人物であった。したがって、レイスロップの意見は彼個人の意見というよりも、ニューイングランドを中心に支配的であったお上品な伝統を支持する人々が抱くホーソン評価の表明であった。ジェイン・トンプキンス流に言えば、『ホーソン研究』は「文化の前景におけるホーソンの継続的な存在を保証する」⁽⁸⁾のに重要な役割を果たす一冊に他ならなかった。そのことはジェイムズ自身も十分に心得ていて、『ホーソン』の第一章につけた脚注で、レイスロップの書物を「これまでに書かれたかなり長いわが作

者の唯一の伝記」と呼び、「この小型本からうけた大きな恩恵に感謝をあらわしておかなければならない。わたしは著者がホーソンの生涯のいっそう興味ぶかい事実を苦心して蒐集されている、この独創的、同情的著述の恩恵を蒙っていること大なるものがある」と述べているのである。

だが、その同じ脚注のなかで、ジェイムズは「レイスロップ氏の著書は多くの他の著者が選んだであろうと思われる調子のものではなく、その論調はわたしの感じでは真に批判的なものでもない」と付け加えている。ジェイムズが『ホーソン研究』を「同情的著述」と呼んでいるのは、フランクリン・ピアスの保守性を弁護するホーソンを「同情的伝記作家」と名付けていたことを思い出させるが、「同情的伝記作家」としてのレイスロップが「真に批判的な」論調で語っていないという指摘は、『フランクリン・ピアス伝』を書いたホーソンが「批判的」でなかったという指摘と正確に重なり合っている。この本の別の箇所、ホーソンが受けた「栄誉」について語った際にも、ジェイムズは「ホーソンの同国人は、こぞって彼を誇りに思っている。そしてレイスロップ氏の『研究』の口調それ自身が、アメリカの物語作家であっても、ある場合には、自分の賛辞を公表してもらうことを期待してよい状態のあることを十分に立証している」と論じているが、レイスロップの「論調」あるいは「口調」（原文ではいずれも「トーン」という語が使われている）が「真に批判的」でないとすれば、このジェイムズの一文はまことにアイロニカルな意味合いをもってくるのではあるまいか。

「明らかに彼 [ジェイムズ] は、レイスロップが単なる伝記を書いたのに対して、彼自身は批判的な伝記を書いているということを示唆したがっている」⁽⁹⁾とはチャールズ・キャラメロの指摘であったが、レイスロップとまったく同じデータを使いながら、ジェイムズはプロットのまったく異なったホーソン伝を完成させた、と言い換えてもよい。あるいは、『ホーソン研究』がアメリカ建国百年を記念する 1876 年に出版され、しかも、その主人公の誕生日が独立記念日の 7 月 4 日であったという事実が、南北戦争以前の「単純なタイプのアメリカ人」としてのホーソンのイメージを強化するのに役立っていたのか

もしれない。いずれにしても、偶像破壊的で、お上品な伝統の人々の神経を逆なでするようなホーソン像を描くことによって、伝記作家ジェイムズは「批判的」でない伝記作家ホーソンを主人公とする伝記を書いた、「真に批判的」でない伝記作家レイスロップとは別種の現実認識を持った南北戦争以後の世代の一人である彼自身の批判精神、「知恵の木の実を食べた」アメリカ人としての姿勢を強く打ち出しているのである。

こうして、伝記作家ジェイムズの目には、伝記作家としてのホーソンもレイスロップもともに批判精神を欠いた、善良なアメリカ人の典型に映っていたにちがいない。『ホーソン』の著者は「批判的」というキーワードで、彼の周辺の「同情的伝記作家」たちを裁断しているが、「知恵の木の実を食べた」伝記作家であることを見事に証明する伝記作品を書き上げたのは、しばしばジェイムズと並び称せられるもう一人のヘンリー、19世紀アメリカを代表する知識人ヘンリー・アダムズ（1838-1918）であった。アダムズは歴史家として有名であるだけでなく、伝記作家としても重要な存在であって、何冊かの重要な作品を残しているが⁽¹⁰⁾、ジェイムズの伝記がイギリス文人双書の一冊であったように、アメリカ政治家双書のために執筆された『ジョン・ランドルフ』（以下『ランドルフ』と略記）⁽¹¹⁾をここでは取り上げてみたい。この伝記は40代前半の油の乗り切った時期にあったアダムズの著作に数え上げることができるだけでなく、本文三百頁ばかりの、アダムズとしてはささやかな一冊であって、一般読者を意識した読みやすい内容になっているため、伝記作家アダムズの特徴が凝縮された形で露呈しているのである。

とはいっても、ジョン・ランドルフ（1773-1833）の名前は、現代の一般読者にはほとんど馴染みがないだろうが、彼はジェファソンやマディソンなどと共に建国期のアメリカで活躍したヴァージニア出身の政治家であった。ポカホンタスと結婚したジョン・ランドルフを先祖とするヴァージニアの旧家に生まれて家柄と血筋に恵まれていた彼は、気鋭の少壮政治家として中央政界に登場した当時、典型的な共和主義者としての名声をほしいままにしていた。強力な中央集

権政府はやがていつかは崩壊せざるを得ないと確信するランドルフは、「真の共和主義」という「新しい政治形態」を樹立したジェファソンを全面的に支持していた。「ランドルフが彼の党のすべての理論を心から信奉していたことを疑う理由はない」とアダムズは述べ、「墮落と不正」を嫌悪し、「自らのうちに政治の純粹さを具現したいと願っていた」ランドルフを称賛している。『ランドルフ』の主人公は、「ヨーロッパの悲惨な経験のすべて」をアメリカで繰り返さないためには、「国家の主権と呼ばれる、この絶大な中央権力」に歯止めをかけねばならない、と考えていた共和主義者の一人であったが、こうしたランドルフの理想主義は、時間の経過とともにあっけなく崩れ去り、かつての典型的な共和主義者もまた「権力の所有によって墮落させられて」しまう。もちろん、権力を手に入れた結果、それに毒され、「政治的に見る影もない存在」となったのは、ランドルフだけではなかった。野に在ったときの共和党もまた、その「最も誠実で熱烈な信念」を忘れ去ってしまうのだが、伝記作家アダムズにとって、ランドルフは共和主義者の墮落、腐敗を一身に象徴する人物であった。「訓練を欠いた、専制君主的な性質」の命ずるままに行動した結果、ついに政治的生命を断たれた彼に残されているのは、「圧倒的な自己中心主義」と「名声を求める渴望」だけであったし、個人的な反感や嫉妬や偏見といった彼の「数多くの悪徳」ばかりが目立つようになってしまう。共和国の美德を失ってしまった彼の性質は、かつては「国民に奉仕し、誠実な政治を確保することだけを目的としていた人間」のそれとは思われないほどに「醜悪」になった。「彼の精神が墮落から墮落へと引きずられた結果、その繊細な本質が破壊されたために、彼の道徳観念が失われてしまったというのは、正しいかもしれない」とアダムズは結論している。

だが、『ランドルフ』の著者を何よりも苛立たせたのは、かつては「州権のチャンピオン」であった政治家が「州権と奴隷制度の一体化」という愚行を取っていた、という事実であった。アダムズによれば、州権というのは「憲法を作成し、それを採用したあの世代の真剣な確信」の中核に位置づけられ、「それ自体は健全で正しい理論であった」ので、ヴァージニアにとってもニューイン

グラントにとっても重要な意味を持っていた。当然、「奴隷制度の権力と州権の間には何の必要な関連もなかった」のであり、中央集権を否定する州権とは対照的に、奴隷制度の権力は「中央集権的な影響力を持っていて、州権への無視できない侵害のすべては、その仕業であった」とアダムズは指摘している。この問題を論じた W・M・デッカーの説明を持ち出すまでもなく、「それ故に、ランドルフが州権の名において奴隷制を擁護することは、彼が自らの主義であると主張している純粋な共和主義の原理を裏切るような矛盾を必然的に伴っていた」⁽¹²⁾のである。この「州権と奴隷制度の一体化」をアダムズは別の箇所では「奴隷制度の権力の下劣な行使への〔州権の〕身売り」と呼び、この「身売り」が「非常にしばしば歴史をかき乱し、誤った方向に導く例の不幸な紛糾の一つであった」と述べているのは、ランドルフの死からほぼ30年後に起こる南北戦争を暗示しているのだろう。さらに、アダムズはそれが「奴隷制度の犠牲者、おぞましい制度を嫌悪する者、黒人の友人（アミ・デ・ノワール）であることを声高に、感傷的な口調で宣言していた人間の仕業」であった、と激しく非難しているが、「州権という言葉は、黒人奴隷制度の利益のために悪用されたために、憎むべきものとなった」ことを告白する彼の目から見れば、ランドルフとその仲間たちの行為は共和主義に対する「組織的な背信」に他ならなかったのである。『ランドルフ』のなかに「ジョン・ランドルフが地域的な狭量と知的な無責任によって南北戦争を引き起こした」⁽¹³⁾というテーマが隠されている、というデッカーの見解が正しいとするならば、「この世で最良の共和国」を「兄弟殺しの修羅場」に一変させたランドルフの生涯を語るアダムズの筆致が辛辣を極めていても不思議はないだろう。

たしかに、『ランドルフ』を読み進める読者は、その主人公がアメリカ共和国を破滅に導いた、弾劾されてしかるべき奸物であるかのように一貫して描かれていることに気づかざるを得ない。ランドルフは生まれ落ちた時から「母乳とともに毒を吸った」と書かれ、無責任で、自制心のない、正気と狂気の間をさま迷っていた彼の死に際は、彼の人生と同じように「グロテスク」であった、とも説明されている。だが、科学的歴史主義を標榜する歴史家アダムズがラン

ドルフの生涯の事件やエピソードを捏造したり曲解したりするはずもない。本書での伝記作家の方法について、J・C・レヴェンソンは「アダムズは事実の正確さを当然のこととして主張したが、一般の読者のために徹底した選択と処理の自由に関する権利を行使した。選択の自由とは、要するに、彼の基本的な物語を伝えるための事実の数を節約する自由であって、それを勝手に歪める自由ではなかった」⁽¹⁴⁾と説明している。ここでいう「基本的な物語」は共和主義の失敗あるいは敗北というプロットを意味していると考えてよいが、はたしてアダムズは事実を勝手に歪めることを一切やっていないだろうか。『ランドルフ』には正確な事実だけしか持ち込まれていないのだろうか。

たとえばアダムズは、ランドルフの精神錯乱について語り、しゃべり散らすばかりの彼の言行が一致していないことを指摘しているが、そこでの事実処理の仕方には疑問を覚えざるをえない。アダムズによると、1828年2月の演説で、いかなる名誉も墮落した中央政府から受けるつもりも、外国に派遣される使節になって公金を浪費するつもりもない、と発言しておきながら、翌年9月にジャクソン大統領からロシア行きの打診を受けると、唯々として受諾している。しかも、1830年6月に出発したランドルフは、ロシアでのポストに10日間留まっただけで、「1年近くを英国で過ごし、1831年10月に帰国すると、政府から21,407ドルを引き出して、英国での旧債の返済に当てた」とアダムズは指摘したあと、この彼の行動を「合衆国政府の歴史における外交上の汚職行為としては極悪のもの」と厳しく糾弾している。さらに、数頁あとでも、このエピソードに言及した彼は、ランドルフの英国での滞在期間を「およそ18カ月」に変更しているだけでなく、「この旅行については、彼の他の旅行と同様、何も言わないに越したことはない。それは彼の政治的意見や影響力と何らの関係もないし、彼を不利に解釈させることになるばかりである」と評している。だが、このアダムズの記述は事実をかなり歪曲したものであるらしい。ランドルフは実際にはベテルブルグに約1カ月（正確には26日間）滞在していたし、英国での旧債を支払ったのはロシア派遣以前のことであった。「著者の判断では、給料、旅行の準備、往復の費用のために認められた金額をランドル

フが受け取ったことは、彼の公人としての生涯の初期の段階を特徴づけていた清廉潔白と完全に合致している」という伝記作家ウィリアム・キャベル・ブルースの発言を引用したレヴェンソンは、「アダムズの攻撃は、不必要に不正確な記述によって弱められている」⁽¹⁵⁾と指摘しているのである。

『ランドルフ』におけるアダムズはまた、主人公を描出するにあたって、しきりに比喩的表現を用いているが、これは事実を重んじる「科学的な」歴史家としてはいささか変則的と言わねばなるまい。たとえば、議会の全院委員会におけるランドルフは「エジプトの工事監督のように委員たちに君臨して、彼らがまるで自分のニグロであるかのように鞭を鳴らした」とされる一方で、チェイス判事弾劾事件で発言する彼の姿は「独裁者を刑場に引きずって行く民衆の保護者というよりは宣告を恐れる犯罪者に似ている」ように見えた、と書かれている。議会におけるランドルフの「攻撃方法」を説明するアダムズは「激しいレトリックが熾烈を極めた状態になると、彼は相手の目玉に親指を突っ込んで蹴飛ばしたり、耳や鼻をかみ切ったり、ベルトより下を打ったりすることができた。それを彼は驚くほどに素早く、執拗にやってのけた」と説明しているが、この説明を読んだ後では、「彼がもしイタリア人であったら、邪眼の持ち主、つまり彼の愛するすべての者に破滅をもたらす人間と見なされただろうし、彼に出会った農民はすべてそっと十字を切ったことだろう」という一文もさほど異様には思われまいだろう。

こうしたアダムズの辛辣な、毒気を含んだ口調は、一見いかにも客観的な記述のなかにも聞き付けることができる。ランドルフはポーハタンとポカホンタスの子孫であることを自慢していたが、「冷淡なニューイングランドの人間」、つまりアダムズのような人間には、彼の人柄や性格は「別の種類の先祖のタイプ」に由来しているように思われる、と述べたあと、伝記作家は次のように指摘している。

長く伸びた腕をしていて、細長い骨張った人差し指をステッキ代わりにして嫌な物を指さす、この痩せた、二本足の姿のなかに彼ら〔ニューイングラン

ドの人間たち]が見いだしたのは、インディアンではなかった。この実年齢よりも老けた、何百という小さな皺の刻まれた羊皮紙のような顔、あの明るい、鋭く光る眼、腹の立つことがあってもなくても、突然、気まぐれな獣性に一変する、相手を煽てたり賺したりする口調や態度などのなかに彼らが認めたのは、インディアン表情ではなかった。そのような体形やそのような性質をインディアンは持っていないが、そうした体形や性質は、何らかの祖先に由来しているとすれば、現れ始めたばかりの理知の嫉妬深くて強欲な本能にインディアンよりもさらに近い種類の生き物に属しているのである。

先住アメリカ人が「現れ始めたばかりの理知の嫉妬深くて強欲な本能」に近いというアダムズの発言は、現代の読者にはいささか人種差別主義的に聞こえるとしても、「微妙に工夫されたりズムと暗に含めた侮辱とでサルを暗示する狡猾な性格描写」⁽¹⁶⁾に目を見張る思いがするのはアーネスト・サミュエルズだけではあるまい（ある手紙のなかで、アダムズがランドルフを「あの気の狂ったサル」と呼んでいることを付け加えておこう）⁽¹⁷⁾。そこにはたしかに「ランドルフは不快な存在であった」と考えるアダムズの、「冷淡なニューイングランドの人間」としての独断と偏見が露骨に表明されているが、『ランドルフ』の著者が伝記作家ジェイムズに批判されていた類いの「同情的伝記作者」でなかったことだけは否定できないだろう。

レヴェンソン流に言えば、このようなレトリックによって、伝記作家アダムズは彼の「基本的な物語」を語っているということになるだろうが、それがアメリカにおける古典的共和主義の失敗の物語であったとすれば、読者としては、アメリカ合衆国が例外国家ではなかったという事実を発見した伝記作家の幻滅と苦悩を『ランドルフ』のなかに読み取らねばなるまい。州権を奴隷制度に売り渡し、美德の共和国アメリカを南北戦争の混沌のなかに投げ込んだ張本人と目されるジョン・ランドルフの生涯をアイロニーを込めて批判的に描き切ったとき、建国の父祖たちによって保証されていた共和国の美德が遠い過去のものになってしまったことを――ヘンリー・ジェイムズの言葉を借りれば、ア

メリカ例外主義が「一種の迷信的信念」に他ならなかったことを、アダムズは実感していたにちがいない。「州権と奴隷制度の一体化」の所産とも言うべき南北戦争を直接経験しなかったにもかかわらず、伝記作家ヘンリー・アダムズもまた、やはり南北戦争に参加することのなかったもう一人の伝記作家ヘンリー・ジェイムズとともに、あの「知恵の木の実を食べた」アメリカ人、「批判的」な「観察者」に生まれ変わることを余儀なくされたアメリカ人であったという事実を、『ランドルフ』という作品は何よりも雄弁に証明しているのである。

注

- (1) Henry James, *Hawthorne*, in *Literary Criticism: Essays on Literature, American Writers, English Writers*, ed. Leon Edel (New York: Library of America, 1984) 315–457. 引用は小山敏三郎訳による。固有名詞の表記を若干変更させていただいた。
- (2) Julian Hawthorne, *The Memoirs of Julian Hawthorne* (New York: Macmillan, 1938) 127.
- (3) Richard H. Brodhead, *The School of Hawthorne* (New York: Oxford UP, 1986) 138–39.
- (4) Charles Caramello, *Henry James, Gertrude Stein, and the Biographical Art* (Chapel Hill: U of North Carolina P, 1996) 44.
- (5) 拙著『ナサニエル・ホーソン論——アメリカ神話と想像力』増補版（東京：南雲堂，1982）229–50.
- (6) George Parsons Lathrop, *A Study of Hawthorne* (Boston: James R. Osgood and Co., 1876) 331.
- (7) Edwin H. Cady, “‘The Wizard Hand’: Hawthorne, 1864–1900.” *Hawthorne Centenary Essays*, ed. Roy Harvey Pearce (Columbus: Ohio State UP, 1964) 326; Brodhead 134.
- (8) Jane Tompkins, *Sensational Designs: The Cultural Work of American Fiction, 1790–1860* (New York: Oxford UP, 1985) 29.
- (9) Caramello 46.
- (10) 拙著『美徳の共和国——自伝と伝記のなかのアメリカ』（東京：開文社，1991）127–47；拙稿「伝記作家としてのヘンリー・アダムズ——『ジョージ・キャボット・ロッジ伝』の場合」『英米文学』[関西学院大学] 第40号第1号（1995年）137–51

を参照。

- (11) Henry Adams, *John Randolph* ([1882], Boston : Houghton, Mifflin and Co., 1899).
- (12) William Merrill Decker, *The Literary Vocation of Henry Adams* (Chapel Hill : U of North Carolina P, 1990) 166.
- (13) Decker 167.
- (14) J. C. Levenson, *The Mind and Art of Henry Adams* (Stanford : Stanford UP, 1957) 99.
- (15) Levenson 113–14 note.
- (16) Ernest Samuels, *Henry Adams : The Middle Years* (Cambridge : Belknap Press of Harvard UP, 1958) 196.
- (17) *The Letters of Henry Adams*, ed. J. C. Levenson, Ernest Samuels, Charles Vandersee, and Viola Hopkins Winner (Cambridge : Belknap Press of Harvard UP, 1982–88) 2 : 468.

——文学部教授——